

綾足「紀行笈の若葉」の改稿

田 中 善 信

(昭和四十九年十一月二十五日受理)

一

青森県立図書館に伝綾足自筆の『紀行』と題する写本三冊が伝存する(原本未見)。昭和三十八年にこの全文が翻刻されて『未刊涼袋旅日記』(綾足会発行)と題して刊行された。その後昭和四十七年にこの改訂版が、井上豊氏の校訂を経て『綾足紀行三千里』(小野印刷出版事業部)と題を改めて刊行されている。

(以下、青森県立図書館蔵『紀行』の本文は井上氏校訂の『綾足紀行三千里』による)

『紀行』は上・中・下の三冊に分かれ、上には「笈の若葉」「芦のやどり」「霜のたもと」「瘦法師」の四編、中は「ちふ山」「越の雪間」「北南」「梅のたより」「かたらひ山」「草のいほり」の六編、下には「東山」「浦つたひ」「花のかたみ」「三千里」「小草録」の五編を収め、『紀行』全体で十五編の紀行文を収める。このうち「三千里」のみは板行されたが(ただし、板本『紀行三千里』の本文は『紀行』のそれと若干異同がある)、他の諸編は写本のままで伝わっていることは周知の通りである。

ところで、日比谷図書館加賀文庫に『涼岱家稿』と題する写本があり、その内容は『紀行』の上巻に一致する(これについてはすでに前田利治氏の指摘がある)。この『家稿』にはかなり推敲修正の手が入っているが、変更を加える以前の『家稿』の本文と『紀行』のそれとを比較すると、漢字と仮名の表記上の相異や送り仮名の有無、あるいは転写の際の誤記といった小異を無視すれば、両書全く同一の本文とみて差支えない。すなわち『紀行』上巻と『家稿』とは、親子本、あるいは兄弟本

といった極めて親しい関係にあるといえるのである。

『家稿』推敲の跡は「笈の若葉」において最も著しく(他の諸編は概ね字句の訂正にとどまっている)、行間に細字で書き込まれた修正の文字は、時に三行四行にわたって余白を埋めており、殆んど改稿というに近い状態を呈している。本稿はその推敲の跡を追って、いふなれば「改稿笈の若葉」の本文を作成しようとするものである。『紀行』所載の「笈の若葉」は、井上氏校訂の『紀行三千里』によって容易に見ることができるが、それと推敲後の本文を比較することによって、綾足の文体上の変遷、ひいては文学観の推移の一端をうかがうことができると思うのである。

二

『家稿』は写本一冊。中本、十九・六厘×十三・七厘。墨付三十五丁。題簽左肩、「涼岱家稿 自一至四」。表紙中央下に「笈の若葉」のやとり／霜□た□／瘦法師」と目次を四行に記した紙片を貼付(□は破損)。全文一筆、目次・題簽共に本文に同筆と認められる(書入れの文字については別に述べる)。

『日比谷図書館加賀文庫目録』では本書を綾足自筆としているが、これには問題がありそうである。本書の「瘦法師」の「奥陸の国に小坂となんいふあり」(井上氏校訂『紀行三千里』三八頁九行目―以下頁数、行数はこの『紀行三千里』のそれを示す)という文言の下欄外に、「問奥陸」と記した紙片を貼付するが、この三文字は本文と同筆と認められる。これは『家稿』の筆写者が「奥陸」の語を疑問としたもので、その疑問を作者自身に正そうとしたメモであろうと思われる。さらに、「霜のたもと」の「けふは葉月の二日夜月云々」(三三頁最終行)の下欄外にも「問」と記した紙片が貼付されている。この紙片は下方がちぎれて紛失したものと思われるが、ここには多分筆写者の不審とした文字(二日夜月であろうか)が記されていたのであろう。こうした事実は本書の

筆者が作者自身ではなかったことを示しているのではなからうか。

本文中に散見する仮名遣の訂正は、右の推測を裏付ける一の傍証になる。『いゝもふくる』を『いひもうくる』、『おかし』を『をかし』、『きこへ』を『きこえ』と訂正するがごとき類は、本書に少なからず散見するが、これもやはり本書が作者自らの筆写にかかるものではないことを暗示しているようである。こうした字句の修正は第三者が書写した本書を作者が一閱して手を入れた結果であろうと私は思う。ただ、本書筆写者の「問」に対して、何ら答えた形跡のみにない点が疑問として残る。

こうした『家稿』の仮名遣や字句の誤りは、殆んど全て訂正されないまま『紀行』の本文に残っている。右に上げたような仮名遣の異同のほかに、例えば『紀行』の「里人のどぞみにぞ」(三二頁一四行)が『家稿』では「そ」の横に「よ」と記した紙片を貼付して「とよみ」と訂正しており、「無種の苦しみ」(三三頁六行目)の『紀行』の語句を、『家稿』では「無種」の横に紙片を貼付して「無数」に正している。こうした事實は、『紀行』の本文と修正を施さるる以前の『家稿』の本文とが極めて親しい関係にあることを容易に想像せしめるが、それでは、それらの親本たる綾足自筆の原稿の表記はどうであったか、また『紀行』の本文の表記上のミスは単なる誤写であったか、ここにも問題は残る。

三

『家稿』推敲の筆は誰によって入れられたか、いうまでもなく作者、すなわち綾足自身によってだと思ふ。ただし、『家稿』には二度筆が入っていると私は思う。一度は単なる字句の訂正、もう一度は表現そのものの変更に及ぶ推敲の筆である。少なくともこの推敲の筆については、綾足自らの手によって入れられたものであらうと考える。本文の筆使いには明らかに転写したと見られる痕跡をとどめる個所があるが、『笈の若葉』に縦横に書き込まれた推敲の文字は転写されたものとは考えら

れない。一旦推敲して改めた字句をさらに変更している個所があることなど、『家稿』推敲の書入れが、他本よりの転写ではなく作者自らの手になることを示す有力な証左とならう。ただし、推敲の文字の書体は、一見したところ私の知る綾足の書体とは趣を異にし、どちらかと言えば推敲以前の「原笈の若葉」の筆蹟に近い。筆蹟の鑑定については私は全く無知であり、書体から推敲の書入れが綾足か否かを推定することはできないが、右に述べた事柄によって、綾足であると考えるのである。

すでに述べたごとく、書入れの跡は『笈の若葉』において最も多く、他の三編は単なる字句の訂正にとどまっており、推敲は『笈の若葉』にのみなされたかのごとき様相を呈している。しかし、推敲の筆は『紀行』の他の諸編にも及んだらしいことは、『紀行』所載の「三千里」と板本『紀行三千里』(安永九年刊・芭蕉庵文庫蔵)とを比べてみることにによって推察される。

周知の通り、板本『紀行三千里』は『紀行』所載の本文の、前半部と後半部を大きく削除している。井上氏校訂『紀行三千里』によって示せば、板本は一一頁一六行「いかめしく旅立事のありて行」に始まり、一一五頁九行目の「入船やみな唐土の秋の風」の句で終わっている。つまり、江戸出立で始まり、長崎入津で終わっているのである。この削除によって起句結句が相照応し、一編の紀行文としては『紀行』所載のものよりはるかにまとまりの良いものになっている。さらに、この間の行文に二ヶ所の変更が見られる。

一は「水無月十五日二子送りて都を出る」(一一三頁六行目)とある条の前に、板本では『紀行』の本文にはない、

角のない石と着合ふ涼かな

洛 大路

川風は人にもまるゝすゝみ哉

同 寛次

の二句を補っているが、これがなければ「二子送り」の二子が誰か読者には分からず、板本の方が修正された形であるとみてよからう。他の一

は、『紀行』の、

(略) 弥生のはじめなりしが、いさり火かそれか霞と遥拝して、又いつかはと思ひ過ぬる。はからずも(略)

とある条が板本では、

(略) 弥生のはじめなりしか

いさり火かそれか霞のいつくしま

とはかり遥拝して又いつかはと思ひ過ぬるにはからずも(略)となつてゐる。前の例に徴して板本の方が修正された形とみてよからう。

この「三千里」の刊本写本の異同から、『紀行』全体にわたって作者の推敲修正の筆の入った作者手沢本があったと想像されるのだが、『家稿』はその一部であり、本来十五編の紀行文を収め『紀行』と同じく三冊をもって完本を成していたとみて間違ひあるまい。板本『紀行三千里』の本文は『家稿』と一つになるべき綾足手沢本を底本にしたかと思像する。

四

すでに断つたように、本稿は推敲後の「笈の若葉」の本文を紹介することを目的とするが、その本文を作成する間に気付いたことを二点ばかり述べておきたい。

その一は客観的記述への変更である。「久保田」を「出羽の国秋田なる久保田」と改め、「昔の学友ぞ爰に室をたちおはす」を「わかくおはせし時まなびの道をおなじうし給ひし人ぞ此庄トいふ所に寺を持ておはす」と改めるがごときは、その最も単純明瞭な事例である。こうした心遣ひが情景描写に及ぼされる時、その記述はより印象鮮明になる。例えば、

卯月のくもり合ひたるけしきいはんかたなし
とある一条を、

空より外にかきりもなし。ことに波しつかに旭もはなやかならずうすくきりわたりたるけしきいはんかたなし

と改めたあたりに、その顕著な例をみることができよう。

他の一は拮据の語調を改めて、なだらかな和文脈へ移しかえようとしていることである。「鳥海雪残りて半嶺雪につまれ」を「鳥海山のいたゞき雪残つてなかはは雲につつまれ」と推敲したあたりにその志向をみることが出来る。「武の梅檀林に硯を同ふして、別れしはいくばくの日ぞや」を「あつまのみやよなる梅檀林に硯を同うして別れしはいくばく昔ならん」と改めてゐるのもその一例に上げてよからう。一体に、「笈の若葉」には『おくのほそ道』の影響が著しいが、周知の通り『おくのほそ道』には漢語のもつ拮据の語調をかりて効果を上げようとした描写が多い。当初綾足はこれに影響されるところがあったが、推敲の過程で綾足はそうした拮据の語調を除去して、なるべくなだらかな和文脈へ移しかえようとしているようである。その実際については、本稿と井上氏の『紀行三千里』の本文を比較していただきたいと思う。

なお本文作成にあたっては任意に句読点を付し、漢字は全て現行の字体にあらためた。

紀行笈の若葉

やよひ末の五日、出羽の国秋田なる久保田を出て、北陸道にかゝる。さて、道のほとは越路の中に月をもこめつゝ、都にはつくこと也とはるけきおもひながら、旅に行ものはいつこにも心とどめぬならひ、旅の具(つづ)ひとふたつ負たれと、いとかるく、戸田川といふを渡りて、松が崎にやとる。こよひそ海の音におどろかされて、夢もむすばず。窓をひらけは波こゝもとに立来て、夜なかの月も朧なるに、ちとり啼つてわたる。

ふき残る寒さとらへてちとりかな

ふたつみつ千鳥残して寒さ哉

あくれば空くもり合ひて、よせかへる波もしつかに、田はたはひたりに

つらなりて、麦はまだみじかく、雉子もあらはにほろゝ打て、旭にむかふ声々いとはなやかなり。

川ありて又舟をくたれば、梅柳今そ江を渡りて春也。何とて此所は華も早ければと問ふに、昔より爰と蛭瀉は雪も浅く、咲き出ることも、此わたりの国にはすゝみぬといふ。されど、やよひの末なればといと口をし。

我連レの禪師、わかくおはせし時、まなびの道をおなじうし給ひし人ぞ、此本庄といふ所に寺を持ておはすよしを、いかで見過さんやと、道をまげて山に入ル。日はのとかに指のぼりて風も吹かす。松ものびらかに立ならびたるくまぐ、ひとへ桜いとほやかに、水は細う流て山吹かさなりさけり。爰を飛ヒかしこをこえて小笹分行に、西の山のそなたに南むきたる寺あり。寛いときよくしたゞりてよろつうちしつまりたるに、撞楼はひとき離れてしげりたる森の中に立るを、きつゝきの飛めくりて虫をはむなど、たくひなき山寺の春のけしきなりけり。

伏せてある鍋は午時なり山さくら

さるにても人やありと、方丈のかたをさしのそけは、さゞやかなるわらはの、机にもたれて、読み忘れたるならん草子をば捨て、障子に飛つく蛇をおさへ、此虫のブと鳴をおもしろけに見居たり。かなたを見れば、四十年余りの長老の、是も旅の具をとり出て破れたるをぬひなどす。人ありと見て、是も捨て、こなたさまに来る。連レの禪師杖を捨て、今ぞとひきぬるとあるに、かの長老もあきれおとろいてしばらく事も聞えさりしが、とばかりしてたかひにいへらく、ま事にあつまのみやこなる梅檀林に硯を同うして、別れしはいつの昔ならん。今はたがひに法の師となり、其いとなみに隔しは私ならず。禪師も転衣のために都へのほり給ふなるへし。我も其志にて旅のよそほひこと物しさふらふ。まつこなたへとむかへ給ふに、我もつきてきさはしにのほれば、若き僧達房を出きたりて、こなたの禪師をらいます。

さて二日ばかり爰にやすらふ。

いひまうくることに、しをでと云ふ物を和にす。此草はこと国になきものとぞ。青き莖の蕨にもよく似て、所々蘭の穀皮とかいふものゝはへる。赤きはかまなるが、此しをでにもまとひて、穂は蔓と花とをひとつにふくみてこもりたる、いと香き味の物にも似す、いとよし。

うしろの山にのほれば、海こそちかふ見ゆれ。此のほとは山の桜盛りにて、長閑けきに、木深きところにはやま鳩うめきて、初メて宇久比寿の声もきく。

かくて爰の禪師も伴ふへきを、さることのさゝはりになん日さへふべし、和師は先づさきに出給へ、都はなにがしのがりにてめぐり逢べしなど、いひむつひて出給ぬ。

やよひ末の九日蛭瀉に着く。爰も法のよしみとて、高岸寺と云禪林にやとる。

雨催ふしたれば、波静かに花あたゝかなり。かのうへこくとよめるけしき、いかで見捨んやとて舟をうかむ。鳥海山のいたゞき雪残つてなかは雲につまれば、ふもとの桜くもり合ひて、今や行春のけしきにあらす。春水纔に深し四五尺とは、誠に此浦の春辺ならん。しまぐをめぐり来て蛭瀉寺に到れば、雨静に降出て花も散らんとす。

きさかたの涕もろさよ華の雨

はせをの此浦をみて、恨るかことしとなんきこえし、誠にさるよそほひぞかし。

けふ迄と蛭吹寄せて波の音

ウツキツイタチ、よべ子のこく斗より空かはりて風はけしく、波の音もいと高く、雨さへふり出たり。けさは衣かふる日なれど、なからに冬の衣をぞうち重ねたり。すこし雨もはれたれば、いとま申て吹浦といふ所に出る。

吹浦に出てやあつみに更衣

かくは申はれといとさむかりし。

あつみ山は此わたりなるかと問へば、まだ道は十里はかりも隔るへしと云。奥の細道といふ草子にはべるふく浦かけてのことば、爰に来ておもひを得たり。さらば我句は十里行て後はしめてことばをなさむ。

是より六里の浜をつたふ。空けしからず黒みて、波もたかく風むかふて、笠はうしろの川にぞ吹入れたり。又甕にも成りて、道いとあゆみくるし。夜ははや初夜とおもふに、少シ晴たれと人里も見えず。風はたち北の海を吹上て、南山にのぼすとばかり、道はいくつにもわかれて行方いとうたがはし。唯西となんおもふかたに、仏にやおはすらん、かすかに火の光りたる。人家あれはこそなれ、何にまれ行にはしかすと、又二里斗も浜辺をつたふほとに、履はいたく破れ杖は折れぬへく、腹はしきりにうへて水に臨まは炎ともならん。行ゆきてみれば、かのほかけは此川尻の舟おさの家なりけり。まづいける心地するに舟おさはよく馴て、只今むかふへ舟をわたしまいらすべしといふに、こなたはいたくぬれたり。しはらく袖をしほり裳をあふりて、飯を乞ふ。磯のみるめをあつものにして、ころよくもりならべていだすにぞ、たゞあまくだるかんなろなどやうの味ひして、ふたもりみりうちくひたれば、舟おさも旅なればこそとてをかしかりぬ。しはらくやすらひて川をわたるに、夜はいたくふけたり。

爰は清川と云が遠く流れ来て、海に落る川しりなれば、水の音もすこく、ふきあれし夕の波もなぎやらで、いとあやうきをからふして岸につく。酒田のみなとはいつくととへば、唯此みちをゆくへしといひつゝ、はやこぎもどして舟はへたりぬ。ともなう禪師いとらみて、まめやかにをしへゆかて、かとうしき人のころかな、いかにせんとて立給へり。我はさはおもはず、酒田はいとちかかへしと云に、禪師はらしくして、わかうどの何をかしれる。われが曰、舟子のくはしくをしへさるは、いとちかければこそと云に、しろき犬の馴きたるありて、我々

をはなれす。うれしくて彼がけ色をなんとし火として行に、細き道を過て町にぞ入ル。先やとりをもとめて旅の具打ほとき濡たるをあまりなどして、つきの日もそこに有り。かくて空晴たれば出る。今日は海のおもてもあをみあひて、野は陽炎暖にのほり、鳥の声もげざやかなり。さるは此渡りの国からにて、春の中は雪も残り風もけしく、花は猶蒼がちにてやよひなどのけしきもなし。卯月そ春の最中ならんに、ひとへは青葉に打交りて八重桜咲ほど、梅は紅梅ぞ綻び出たる。山吹もにほやかにて桃なしヒラケ、つゝじ木瓜岩根にもえつゝ、かの柳をましへたれば、唯天か下の春をあつめたる、見所多し。あつみ山のふもとにやとる。夕くれことさらに長閑なり。

華に酔人やさまして青すたれ

あかつき此のやとりを出て磯山づたひに行。道のほどははれやかに海を見なして、空より外にかきりもなし。ことに波しつかにて旭もはなやかならず、うすくきりわたりたるけしきいはんかたなし。

三里はかり行に、村の翁どもいたく酔たるかことありげにむかへ出て、禪師は都にのぼり給ふなるべし。いくりなくおぼすべけれど、こなたへ来たり給へ。頼まいらせたき事有、と山門に入。内をみれば大きな寺の方丈をおしひらき、若き老たる多くならひ居て、物くひさけのむさま也。さるは此院の和尚も都の方へ立し給ふなるを、檀越の人々御馬のはなむけとて、かくいはひてつとひたるなり。さておなじ法の御友なれば、ひとりも多からん、道の御ちからなるべく、またたちはき給へるわかうども伴ひ給へは、こなたにもうしろやすくなるといふ。其太刀はきたるつわ物はすなはち我なればころのうちにいとをかしかりし。是より道すからも打にきはひて行ほどに、きのまたと云所にやとる。爰もののりのよしみ有院也ときこゆ。

さるは此所を鎮守御神とて、海へにさし出たる岩の上に、小さきほこらの立給へり。夕日さしむかふて波もいとさよらなるに、人々ふしおか

み道の末ことなかれとねき申に、をさめまつる句なんせよときこえたるに、

波にたつ神のたもとや青あらし

これより巖が関打こえて葡萄越と云峠にかゝる。路のほと五里ばかり也。

山半余り分入りて、越後の国の境也と云。さすがに雪残りて梢も寒く、谷にくたり峰にのぼるほどたゞこほりのみをふみて、道さらにみえず、斧のひゞきもおぼつかなし。南とおもふ方には、彼岸桜かすかに咲て、今そきさらきのけしきなれば、

日あたりは夏草なからはつ桜

里ちかくなれば山もひきく、菜の花もうちくもりて、空のけはひもあたゝかなり。此夜はぶどうといふ所にやどる。

あくれば村上の国府をもすきて、桃が崎に出る。

扱ゆく先も皆かゝる海辺なりと、まことに能登の国なる鈴がみさきもはるかに見ゆ。扱此わたりの浜辺に古き寺あるをよし有けなれば問ふに、甲乙宝寺と云なり。紅梅のひと枝ふた枝さき残りたるに、

夏散るも梅の咎なし古曆

次第浜

行春に雁やおくれて次第浜

空あたゝかに霞たる日何となき原中を、ちかければと人のをしゆるにまかせて行。麦はやう／＼穂に出たり。

空豆の花にもくもる卯月哉

野中の松こゝろのまゝに老ひて、やぶ藤岸にかゝり、つばな穂に出て、土おほねも今こそさけ、ただ時しらぬは卵のはなにぞ有ける。扱方辺より小さきわら家押明つゝ老たる舟長の、舟やるへし、のりたまへと云。いつこへと問へは、十里はかりの道を一時にくたる川也、早く新潟の湊に

は着なり、水は此まゝに浅けれど、舟かるければ足はやしなとすゝむるを、さる事ならんとうちのる。朝のほとはくもり合たりし空の名残なくすみわたたりて、雲雀舞のぼりほじる鶯雀なども鳴つれたり。卯つき七日なれば、

あすは摘華指さして舟の中

皆呵る舟の遅さよ練ひばり

かくいふことを舟長か聞て、我おそきにあらす、水をこそ呵りたまふへけれ、旅人は哥よみ給ふな、ひとつ書てたまはれといふ。をかしければ、ふところ紙にみしかき筆して、

野も浅き麦の穂波にわたし守

としるしたれば、我事あてたまふなとうち笑ふ。こゝろかるき翁なれば、何くれといひかたらふほとに、日は西の山にかぐるひて、大きやかなる川の横たふたる有ルが、是ぞかの新潟の湊なるよし。おしわたりてきしに着ぬ。こよひは爰にやどる。

四月八日、新潟のみなどを出るに、けふはことさらに空晴て、山も少し青みあひたるに、白雲遠く立て、夏木立影ひろごりたるに、桜は猶咲てあり。

葉に青き嵐かこふてさくらかな

かしこに指月寺と云寺あり。灌仏の日なれば立よりて、

七歩みすでにほとけの旅こゝろ

弥彦明神

木立たかくしけりて、御燈尚明かに、くれはてたれば、いや彦のおのれ神さびと詠るも、此宮居ならんに、

すみわたる祢宜のくさめや夏木立

此みねより左りのかたに、木深き森の見ゆる。世に云大江山の鬼のいまた児也し時、□寺にそをひたちたりと云。

その峰の鬼子もゆかしほとゝきす
弘智法印の入定骨を拝す。

夏の日も骨にしひれはなかりけり
いつみ川と云をわたりて、越の長浜を過る。

はや涼し磯も越路は雪の音
雨降出しほとに、つのは姫川のわたりかなはず、今朝こへなはといふ
に、辛してわたる。

此わたり平砂かきりなき磯山の、誠に不毛の地ともいはむ。
駒かへり

野に茂き草や見付て駒かへり
所の名さへ物かなしきに、

ほとゝきす巢は春出て親しらす

越後越中の境川

五月花さく岸や青葉と境川

立山禅定の道を見遣る。さるはかの六道もめくる人ありときくに、

下やみやこゝにも細き杖の音

高岡にやとりて、これより能登の国へ伴はるゝ。山も五里はかりそゆく。

峰に成ル雲踏みゆけば谷深し

風よければとて七尾に足も留す、夜ル舟にうつる。掘穴水といふにかゝる。夜は深かるべし。

舟に寝よ夜はみしかしと鶉の声

さるは人居もあるにそあなれ、またくらきに道もしらていかて行かん、舟の長よ火はなきか、挙よといへと、軒あはせて、舟の子もいたくいねたり。

森や出て闇の上ゆく夏の月

遠つたは波もさやかに照しなから、爰は下闇のうもれたるに、

吸分けて水へかたつくほたるかな

又とりの声のしきりなるほと、海はほのく見へて、されたる森の木立、幽かなる磯家、遠きいざり火も消がてに成りて明ぬ。

また起きぬ家ふたつみつ夏木立

旭あかふ見へかくれて、山かつらいとしろく、旅ころもしめやかに霧深くこめて、雨になり行山路さひし。

卯の花の濡てつもるや笹の上

惣持寺の房にとる。

谷こへて茶板のひゞく清水哉

夜明て門にのほる。七堂雲に入りて木立深く、高閣簾たれて沓のおともしつかにきこゆ。

かたつふり僧の歩みとあとやさき

うしろの山にのほりて、開祖禅師の坐禅石を礼す。

あたゝめた石も涼しき人のあと

けふは色衣たまはる日とて、方丈はれやかに払ひ、衆僧礼を以和尚を請ず。我は髪長にあらすとて、此方より見る。

後醍醐天皇御いつくしみ深く、二祖義山和尚にたまえる御衣、玉の箱にそなへて、其ことわり読むなん、いとたふとし。

年経てや雲井の袖も苔の花

是より北海のかきりを尽して、福浦にいたる。むかし支考が筑紫行に、吹浦の文字をあやまりたりといひしは、此浦の文字にそはへらん。ふた日はかり行ほとに、加賀の国金沢に出る。つれの人のいそぎにそ、むなしく風人の雅境を過る。

小松の駅を過て、

春ひかぬ根や夏長て小松原

しら山

雪見へて森尚すごし諫鼓鳥

桶ヒの川カミと云は此わたりなるや、そのあとはわかねど、木曾義仲の古城と
きくに、

爰もかなし植ウヅる深田に駒の声

湯尾峠

夏木立イモ庖イモやはやらて神さひし

近江

福原より舟かりてゆかば、あすなん都には着へしとて、其夜夢なからか
いおこされてそ乗ル。

中空に舟やかゝりてほとゝきす

風なければおなし所に淀イカサおろして、その夜も更ツレぬ。

あかつきの鐘三井を落て、比良はしら雲の中よりもれつゝ、松のからす
堅田に飛ちり、栗津石山アハツもまのあたりに、膳所ヅクも波の上にしらみあひ
ぬ。

みしか夜や夕日のまゝの橋もあり

けふは尚くもりて風吹ず、帆フナも揚ねば足おそくて、たそかるゝ頃辛崎に
つく。此夜雨。

はしめには松の散ルかと夜の雨

(付記、貴重な図書の閲覧を許された日比谷図書館、関口芭蕉
庵文庫、教示を賜った前田利治氏に深謝申し上げます。)